

文学に見る馬の姿

-文化的意味と表現の変遷-

自己紹介

平戸華凜

高校2年生

趣味:読書



趣味と馬を掛け合わせて探求したい！

文学という角度から、
どのように「馬」が見られて
きたのかを探ろう！

仮説

- ・馬といえば、馬車のような移動用途が考えられる。馬車が裕福さの象徴のように考えられていたのではないか
- ・馬は、文化圏の差を表すもの、国や共同体の高水準な文化レベルを示すものとして扱われていたのではないか

目次

- ・ 馬の歴史
- ・ 文学における「馬」
- ・ 「馬」の象徴性
- ・ 結論

目次

- ・ 馬の歴史
- ・ 文学における「馬」
- ・ 「馬」の象徴性
- ・ 結論

馬の歴史

日本に馬が出現したのは
… **4世紀末** 古墳時代中期

朝鮮半島から流入し、
九州に渡来したのち、
100年ほどかけて
日本列島全域に広がる。



Adobe Stockより
(これ以降のスライドで出典元が記載されていない写真も全てAdobe Stockより引用)

馬の歴史

5～6世紀…当時の
日本では内紛状態
が続いていた。



軍事的なツールとして馬は普及した。



馬の歴史

7世紀以降の律令体制下で、**朝廷**による馬匹生産が整備されていく。軍馬など、国家が必要とするウマを生産することのみを目的としたが、その生産方法はかなり粗放で、一年中放牧して自然に増殖させる**野馬生産**であった。

馬の歴史

平安時代中期以降、
馬は**富裕農民層**まで
浸透した。

しかし、当時の馬は
体格が小さく、主な
用途は荷を背に乗せて
運ぶ**運搬用**だった。



馬の歴史

戦国時代においても、軍事用・高位の人物の**移動用**の他に、**運搬用**の動物として市井の人々に広まっていった。



馬の歴史

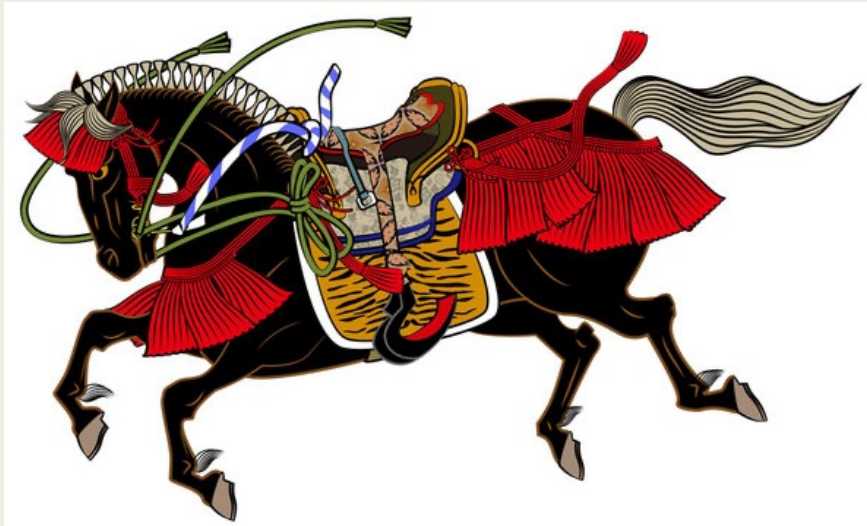
14世紀以降には、「**馬借**」
という商人兼流通業者が
登場し、勢力を拡大した。
また、江戸時代から**洋馬**を
輸入し、馬匹の改良を行う
ような動きがあった。



「江戸時代の日蘭交流」,国立国会図書館
<https://www.ndl.go.jp/nichiran/data/R/147/147-002r.html>

馬の歴史

明治時代以降、本格的に**軍馬の養成確保政策**の一環として、馬匹改良が行われていった。



「乗り物ニュース」 <https://trafficnews.jp/post/98994>

馬の歴史

20世紀には、敗戦により
陸軍が消滅したことに加え、
1960年代の高度経済成長
期より日本の農村で**機械化**
が進行することで、農耕馬
は在来種・改良種を問わず
激減した。



昭和館デジタルアーカイブ

<https://search.showakan.go.jp/search/photo/detail.php?id=90015476>

馬の歴史

その後1948年に新競馬法が、1954年には日本中央競馬会法が公布され、日本の馬産は**競馬主体**へと転身した。



馬の歴史

平安時代から武芸として成立した「**流鏑馬**」は南北朝以後衰え、室町時代にはほぼ廃絶したが江戸時代中期に再興され、今日では**神事**として神社の祭礼に行われている。



馬の歴史-まとめ-

日本における馬と人間の関係は古く、古代から**農耕や移動手段**として利用された。平安時代には**貴族の象徴**、戦国時代には**騎馬武者**の重要な存在として活躍した。江戸時代には**庶民の商業・交通手段**として普及し、明治時代に入ると西洋文化の影響で**品種改良**が進んだ。

近代化が進む中で、農業や交通から競馬などの**スポーツやレジャー**の対象へと役割を変え、日本の文化に深く根ざしている。

目次

- ・ 馬の歴史
- ・ 文学における「馬」
- ・ 「馬」の象徴性
- ・ 結論

文学における「馬」

平安時代の馬



e国宝より

「古今和歌集」

醍醐天皇の詔により撰ばれた最初の
勅撰和歌集。

平安前期の歌集として国風文化、
歌論を中心とした日本文学に大きな
影響を残した。

文学における「馬」

平安時代の馬

『馬を連ねてさあ見に行こう、
「ふるさと」はまさに雪のよう
に花が散っているだろうから』
という歌。

五、六騎の馬が雪のように降る
桜の下を駆け抜けてゆくような
爽快感のあるイメージが浮かぶ。

駒なめて いざ見にゆかむ
ふるさとは 雪とのみこそ
花は散るらめ

文学における「馬」

平安時代の馬

『嫌われているこの身は、春の馬でしょうか、あなたは野で放ち飼いをするように私を遠ざけて、ついでに見捨ててしまいました』という歌。

春の馬が**孤独や疎外感**の比喻として用いられている。

いと はるる 我が身は春の
駒なれや 野がひがてらに
放ち捨てつつ

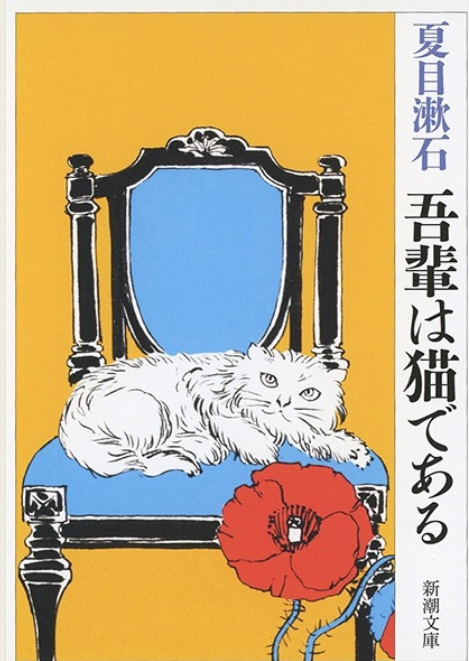
文学における「馬」

平安・江戸時代の馬

- ・花びらが雪のように舞い散る中、馬が駆け抜けるという描写は、**自然の一部としての馬**を象徴している。
- ・朝廷が行なっていた野馬生産の一環である**放牧**が比喻として利用されていることから、馬の生産が**広く人々に知られていた**ことが読み取れる。

文学における「馬」

明治時代の馬



新潮社より

「吾輩は猫である」

夏目漱石の**長編小説**であり、
処女小説。

猫の視点から人間の生活が
風刺的・戯作的に描かれている。

文学における「馬」

明治時代の馬

"人間の糟から牛と馬が出来て、
牛と馬の糞から猫が製造された
ごとく考える"

抜粋:「吾輩は猫である」 (二)

文学における「馬」

明治時代の馬

この表現において、馬は人間に近い存在として、猫と対比されている。人間>馬>猫という図式は、馬が農業や交通における重要性を持ち、愛玩動物である猫はそれに比べて劣る存在と見なされているという、当時の社会の価値観を反映している。

文学における「馬」

明治時代の馬

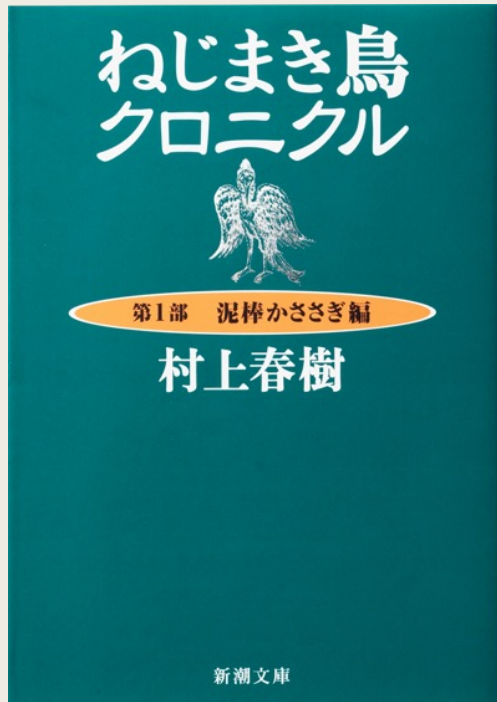
"馬や車が通る大変賑やかな場所"

抜粋:「吾輩は猫である」(十)

この表現は、当時の社会において**馬が主要な移動手段や物流の手段**として重要であったことを示している。馬と車が同列に語られ、馬が**人々の生活や経済活動を支える存在**だった当時の社会を象徴している。

文学における「馬」

現代の馬



新潮社より

「ねじまき鳥クロニクル」

村上春樹の8作目の**長編小説**。
妻の失踪の原因を探して様々な人と
邂逅していく「僕」の物語。

村上は「『ねじまき鳥クロニクル』を書くとき
にふとイメージがあったのは、やはり**漱石**
の『**門**』の夫婦ですね」と述べている。

文学における「馬」

現代の馬

「（前略）馬というのは肉体的にも精神的にも、月の満ち欠けに非常に大きく影響される動物なんだ。（中略）満月の夜になるとたくさんの馬が病気になるし、死ぬ馬の数も圧倒的に増える。（後略）」

「（前略）満月の夜に納屋の上に寝ころんで、口から白い泡を吹きながら、苦悶に喘いでいる馬のことを考えてみなよ」

彼女は納屋の中で死んでいく馬たちについてしばらく考えているようだった。

文学における「馬」

現代の馬

この表現では、馬が自然の力、特に月の満ち欠けに大きな影響を受ける存在として描かれており、**馬と自然との繋がり**を示している。満月の夜に病気や死が訪れるという描写は、馬の生き様が人間の運命や宿命と重ねられている。

移動手段や農耕手段として身近な存在ではなくなった馬は、**自然と人間の境界に存在する象徴的な存在**とされるようになったことが読み取れる。

目次

- ・ 馬の歴史
- ・ 文学における「馬」
- ・ 「馬」の象徴性
- ・ 結論

「馬」の象徴性

ことわざから考える「馬」

「馬の耳に念仏」

馬を相手にありがたい念仏や経文をいくら聞かせても無駄である。価値のあるものでも、持ち主によって何の役にも立たない。

「何処の馬の骨」

どこの誰とも素姓の分からない者。

「馬には乗ってみよ、人には添うてみよ」

馬の良し悪しは実際に乗ってみなくては分からない。人柄の良し悪しも一緒に暮らしたり仕事をしたたりしてみなければ分からない。

「馬」の象徴性

ことわざから考える「馬」

「馬は日本人にとっても身近な動物であった。

「馬」を含むことわざの数は極めて多い。馬は家畜として**価値が高く優れている**と肯定的に捉えられるとともに、**無知であり臆病であり癖が多い**とも捉えられた。また、さまざまな体の部分や動作・行動を細かく取り上げたことわざが多く、特に**飼育や乗馬**に関わることわざが多い。」

「馬」の象徴性

フィクションの中での「馬」



東京創元社より

「夜の国のクーパー」

伊坂幸太郎の10作目の**長編小説**。

「猫」，「私」，「僕」の**3つの視点**から交互に物語が語られている。

「馬」の象徴性

フィクションの中での「馬」

(前略) (猫の視点から初めて見た馬に対して)

動きが素早そうな動物だなと感じた直後、その動物が脚を大きく上下させ、飛び跳ねるかのように走りはじめた。

(中略)

貫禄があり、歩き方は優雅だった。この生き物はやけに格好いいぞ、と僕は、少し歩き方を真似してみる。

(中略) (猫が聞き取った人々の囁き)

ねえあの動物何かしら、牛でもないし、と波立つ。

「馬」の象徴性

フィクションの中での「馬」

この表現では、猫の視点から見た馬の特徴が描かれている。馬の動きの素早さや優雅さが強調され、その存在感が際立っている。猫は馬を「格好いい」と感じたり、歩き方を真似しようとしたりと、**馬の持つ威厳や美しさ**に魅了されている。

また、人々が馬を知らないと描写することで、読者には、馬を知る集団と知らない集団の間に**文化的断絶**があるということを読み取らせる効果がある。

目次

- ・ 馬の歴史
- ・ 文学における「馬」
- ・ 「馬」の象徴性
- ・ 結論

結論

馬は単なる動物ではなく、文化や歴史、さらには人間の感情や価値観を象徴する存在であることが明らかになった。馬は**力強さや美しさ**の象徴として描かれる一方で、**無力感や運命の脆さ**をも表現する。

また、文学作品において馬は身分関係や社会構造を反映し、読者に様々なメッセージを伝える重要な役割を果たしている。したがって、馬を通じて表現される人間の心の奥深さや自然との関係性は、**文学の中で不可欠なテーマ**となっていると言える。

今後の課題

- ・外国の文学と「馬」にはどんな関連性があるのか、日本とはどのような違いがあるか
- ・絵画や彫刻における「馬」はどのような変遷を辿ってきたのか
- ・日本各地の地方文学や民話における描かれ方から、「馬」の地方による価値観や役割の違いは見出せるか

ご清聴
ありがとうございました！